

トピックス

私の宝物

「メモリアルボール」



チームメートの写真をあしらったメモリアルボール

ソフトボール少年団の卒団員へなにか記念になるものはないかと、思案中にスポーツ仲間から

紹介されたのが、各種のボール表面に自分のお気に入りのポーズや、チームの記念写真を焼き付けたメモリアルボール。早速、製造メーカーに連絡し好みのボールを造ることにした。出来上がったボールには卒団生の笑顔いっぱいの写真が貼られて、世界に一つしかないオリジナルボール。贈られた子供たちは大喜びで、「生の宝物」と大はしゃぎ。子供たちの中には「嫁入り道具の一つにする」と気の早い女の子もいた。

メモリアルボールは子供たちの贈り物だけに終度で完成し、手元へ届く。注文を受け、大きさや色合・写真のサイズなどを決めてから、四十日程で完成し、手元へ届く。

実用新案登録番号 第3104565号

思い出入り フォトボール

株式会社 江永化成 TEL/FAX 054-623-6330 kouei-k@ai.tnc.ne.jp

小学生 男子・女子 新人ソフトボール大会

▽男子の部

【二回戦】長岡ジュニア13

3大中ソフトボールSS

S、相良ソフトボールSS

10-0 清庵男子ソフトボールクラブ、東豊田ソフトボールクラブ、東豊田ソフトボールクラブ、下野ブルースターズ

13-0 静岡西小、安部口S

【三回戦】相良ソフトボールSS 9-8 長岡ジュニア、東豊田ソフトボールクラブ 4-3 下野ブルースターズ、安部口SS 11-7 裾野ジュニアウエイトリ、袋井北ファイターズ 23-2 沼津北ヤンキース、長田南少年ソフトボールクラブ 5-1 浜松SBC、松野フットボールSS 4-2 大南ソフトボールSS、赤佐EFV

【準決勝】袋井北ファイターズ 5-1 東豊田ソフトボールクラブ、長田南少年ソフトボールクラブ 7-0 赤佐EFV ウエイトリ

【決勝】長田南少年ソフトボールSS 4-3 袋井北ファイターズ

▽女子の部

【二回戦】築地ビスケット15-0 三島女子ソフト、掛川桜木女子ソフト 10-9 静岡チェリーズ、浜松ドルフィンズSS 6-4 松ソフトボールSS

【準決勝】掛川桜木女子ソフト 39-1 浜松ドルフィンズSS

【決勝】掛川桜木女子ソフト

審判・記録コンテスト

ベストアンパイヤー＆スコアラー!

父親大会を題材に速さと正確さを競う

記録委員会では、記録技術の研鑽とその成果を競う中から、公正・正確・迅速を基本に記録員の資質と記録技術の向上を図り、優秀な記録員の育成と人材の発掘、リターへの育成を目的としたコンテストを十一月二十日(日)、焼津市で開催された第36回父親ソフトボール大会決勝戦を題材に実施した。

コンテストには県下各支部から十七名(うち女性記録員は六名)が参加し、日頃培った記録技術を競い合った。今年度は一種から三種までの全資格者が対象となった結果、高い記録技術の中で競い合いとなった。

▽入賞者は次の通り

【最優秀賞】鈴木保(金谷支部)

【優秀賞】鈴木義則(焼津支部) 高橋安(島田支部)

【努力賞】鈴木庄二(袋井支部)

一方今回で三回目を迎えた審判員コンテストが、同じく父親ソフトボール大会・二日目の準々決勝の二試合を題材に実施された。コンテストには主管支部焼津支部からの四名と東・中・西部から各四名の合計十六名が参加。

厳しい審査の結果、球審の部で野原 進審判員(裾野支部)、塁審の部で松浦兼善審判員(焼津支部)が最優秀審判員に輝いた。コンテスト終了後、斉藤審判委員長は「各支部で頑張つて底上げを図ってほしい。」と激励する一方で、「技量の評価は自分ではな

く、他人(周り)が決める。アドバイスを受けるときに花。数をこなして経験が積むことが大事。」と今後の前進を促した。

最優秀審判員のコメント

野原さん・緊張の連続だったが普段どおりを心がけた。諸先輩のお陰です。

松浦さん・程よい緊張感が良かった。ルールブックを読み返しコンテストに備えた。(焼津・八木美代子)

早く・正しく・公正に

高校生を対象に研修会(記録委員会)

一月十四日(土)三島北高校紫苑荘に於いて、東部高体連主催の記録員研修会が静岡県ソフトボール協会・芦沢記録委員長、戸口東部記録委員長を講師に招いて開催された。

研修会には東部の高校から八高・二十九名のソフトボール部員が参加。

研修会ではスコアカードの記入方法や、日本リーグのビデオ研修を基にスコアラーとして大切な「早く(迅速)・正しく(正確)・公平を旨とする基本姿勢から、安打・失策・野選などの具体的な事例研修など、全員熱心に耳を傾けながら漏れなくメモを取っていた。

真剣にメモをとる研修生のみならず

ソフトボールを始めた翌年の昭和36年、大学(日体大)二年の時、米軍キャンプチームとの試合でウインドミル投法と出会った。

米軍投手・バンドルが大きく腕を回して投げ出す速球と、七色の変化球に度胆を抜かれた。

ウインドミルに魅了されてから当時の監督・下奥先生に投手としての手ほどきを受けながら、ウインドミル投法の練習を続け、マスターするの一年かかった。

昭和37年の最終学年の時、東京都予選を勝ち三重県での全日本総合大会(当時)

時)にて、日本で最初のウインドミル投法を披露した。

また、同年秋、岡山国体で下奥先生の下で、高校生チームにウインドミル投法について実技講習を行った。

それまではソフトボールの投法はスリングショットが主流で、希に体をくねらせるエイトフギアがあった。この二つの投法は共に、腕の振り(しなり)を利用したものであった。これに対して、ウインドミルは腕の遠心力を利用したもので、球速・制球ともに群を抜いていた。

ウインドミルの魅力はブラッシング(腕を腰にこする)から生じるウィップ効果(むち打ち効果)による速球と変化球。コーナワーカーの制球も安定する。一方、高低の制球をマスターするのが困難である。

体位体力が向上した現在、ウインドミル投法は投手の標準投法となってきた。最近ではジャバニングスローが主流となつてはいるが、変化球を投げる上では優位に思える。しかし、ルール上は不正投法であるセカンドポイント(ツーステップ)を時々目にする。注意しなければならぬ。

ウインドミル投法と出会って印象に残った試合は、昭和37年ハイチチームとの親善試合に東京遠征チームの一員に選ばれ、主戦投手として七回を投げ、主馬教員の三宅投手と投げ合ったこと。残念ながら二試合とも敗戦投手だった。

最後に中・高校生で投手を目指している選手に伝えたい事は、変化球も必要だが、投手の真髄は速球である。速球がある程度自在に操れることができる、安定した投球フォームを身につけることが先決である。